

萩原雄祐著「星雲の彼方」

水 間 嘉 典

本職の天文学者がこの欄を書くのが筋合いであるがそれでは芸がなさすぎるので異端者の私を書くことにしよう。関西では少しは名の知れた会社のまあ言わば平凡なサラリーマンの一人である。

一冊の本、一篇の論文と云うが私もこの一冊の本が出版されなかったら有能な先輩先生方を知ること、すぐれた若い研究者の馨咳に接することも出来なかったし、私自身も天文学を学ぶことはなかったであろう。

昭和19年、20年といえば、戦争の最中、勉強は出来なかった。

やっと戦争がすめば、戦火の街にほっぽり出されて明日のパンの為に汗を流さなければいけなかった。

美も醜も一夜にして焼き尽くされた街に夜は更けて、今でいうスモッグとてない限りなく蒼き空に本当に宝石を散りばめた美しい星がはめこまれていた。

疲れきった体で明日はと問えば暗かった。

そんな時にやはり限りなき彼方の星は荒んだ心のオアシスであった。

十年もすれば世の中は落ちつくだろう。一生懸命働けばやがては豊かな生活がやってくるだろう。そう思いながら夜毎に星を見ていた。

萩原雄祐著「星雲の彼方」は昭和24年6月30日発行、定価180円、恒星社厚生閣が発行元である。

この本は絶版になって久しい。持っている人でも年を経ているので忘れているかも知れない。目次を紹介しよう。

1. 天文学序説
 2. 公理学的物理学の建設と物理学的空間概念の発展
 3. 星雲の彼方
 4. エッディントンの新相対性理論
 5. 三体問題の沿革について
 6. 今後の日本に於ける天文学の動向
 7. 時と文化
 8. エッディントンとジーンズ
 9. 平山信先生を憶う
- の9章からなっている。

各章とも著者萩原先生の珠玉である。本職でもない私は多くを述べることをさし控えるが、若かった私はこの本によって天文学を知った。

まずよみ易い1章と6章をくり返し読んだ。ややあって5章の三体問題の沿革についてをむつかしいがたどりとどき読んだ。

今でも少しわからないことがあると読み返している。

この二十有余年の間の天文学の進歩はめざましい。この本に書かれていない幾つかの分野が新しく生れている。

表紙は手垢に汚れ、装丁の崩れてしまった一冊の本を机の上に置く毎に若かった日の限りなき無謀さを思い出すのである。

緑の木立に囲まれた教室で述べる天文学であればこうもゆかなかったかも知れないが私はフリーランサーである。

三体問題に魅せられているいろいろ調べ考えてみたが鉄壁にぶつかった。

新しい数学、表現をかえて言えば、細かく石垣のように組まれた現代の数学とは違った気遣いでもやるような数学を武器にして天体力学を解明しよう。色あせたノートに書いては消し書いては消した。いろいろの着想が書かれてあるが大半はどうひいきみにみても数学的に正しいとは言えない。誰か天才的な能力で何かを開発してくれないだろうか。

所詮は私の力より向う側に問題はあった。

星雲の彼方

まずは観測である。大望遠鏡はともかくとして、ざっとみたところ明るい光学系のシュミットカメラに着目した。

日本の工業力を考えればそう無茶苦茶に大きいものは出来ない。

それはBK7、F2の組合せの色消し補正板を考えたからである。パロマの48吋と同じものが欲しい。しかしもう一回り小さいのもよい。補正板が20吋より30吋までのシュミットカメラでいつの日か観測しよう。

架台はオール油圧で出来るだけ電気部品を少なくしよう。故障、修理、保守、点検は品質管理から出た考えでもあった。

光学理論の本を手にした。ばらばらになった本もある。レンズをせっせとハンドルを廻して計算した。

電子計算機の発達をこの目でみる。将来の為に計算機

のプログラムを勉強し始めた。

それが今、仕事でミニコンの番人となるきっかけともなった。

近年、シュミットカメラが設置されると聞くにつけ、がむしゃらに計算機を廻した若い日の無謀なからまわりの思い出が思われる。

屋は大阪の街で仕事が容赦なく待っていた。夜、灯の下で疲れた体にむち打って本を開いて読んだが遅々として進まなかった。

やがて学問は私を追いこしていった。

私は追いこされてもまだまだやることがあると信じている。多くの通常会員の人も少しぐらいのことには挫けずに天文学に対して情熱を燃して欲しい。本当は行きつ戻りつ彷徨という言葉が適切で私の無能をここにさらしているに過ぎない。

一冊の本

その出会いは人それぞれさまざまであろう。しかしこれによって、怠惰の私自身に大かつとなったのは著者の天文学への情熱であろう。

最近になって英文で書かれた第一冊目の本を手にした。やはり私の身邊に置かれることになるだろう。

「星雲の彼方」

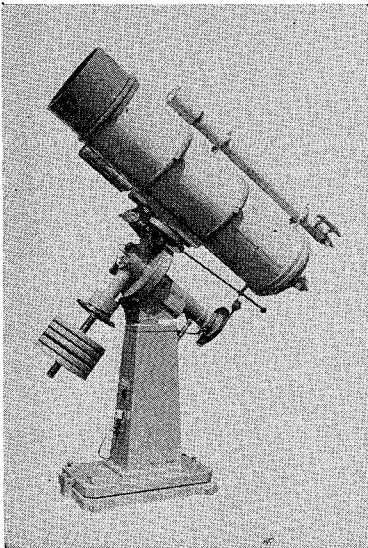
この一冊の本は私の最初の天文学の師でありこよなき友でもある。

本当は一章一章詳しく説明するのが筋であるが、私は机の上で天文学をあまり習ってはいない。道を歩きながら本を読んだり、油と切粉に汚れた作業台の上で計算したり、仕事の帰り夜おそく星座を覚えたり、屋の休み時間同僚が煙草をふかしているのをよそにノートを整理したりした。しかし、私のは少しばかり学んだ天文学でからっけし駄目である。出来ることはどんな仕事でもがむしゃらに進めてゆくぐらいのことであろう。

近頃本屋に行くとき若かった頃の百倍ぐらいの天文学の本が並んでいる。

この一冊の本が将来、天才的な、有能なる天文学者を生み育てるきっかけになることを願うものである。

(大阪ガス株式会社配送管理センター)



天体望遠鏡
ドーム、製作

西村製の天体望遠鏡

40 cm 反射望遠鏡の納入先

- | | |
|--------|---------------------|
| No. 1 | 富山市立天文台 |
| No. 2 | 仙台市立天文台 |
| No. 3 | 東京大学 |
| No. 4 | ハーバート大学 (USA) |
| No. 5 | ハーバート大学 (USA) |
| No. 6 | 台北天文台 (TAIWAN) |
| No. 7 | 北イリノイズ大学 (USA) |
| No. 8 | サン・チェゴ大学 (USA) |
| No. 9 | 聖アンドリウス大学 (ENGLAND) |
| No. 10 | 新潟大学高田分校 |
| No. 11 | ソウル大学 (KOREA) |
| No. 12 | 愛知教育大学(刈谷) |

606 京都市左京区吉田二本松町 27

株式会社 西村製作所

TEL. (075) 771-1570
691-9580